

母と花の物語

大塔 優香 東京都世田谷区 五十歳

ブルン！夕方になると、車のエンジン音と共に、母は迎えにやってくる。フルタイムで働いていた母が迎えにくるまで、小学生だった私は、いつも祖父母宅ですごしていた。車の後部座席は、毎度、母が仕事帰りに買ってくる花でいっぱい。

「庭を花でいっぱいにするのがお母さんの夢！」母はいつもそう話していた。

帰宅後、母が花を植えるそばで、おしゃべりしたり遊んだりしている時間が大好きだった。花を植えている時の母はとても幸せそうに見える、その気持ちはこちらにも伝染してくるようだった。あれから約四十年が過ぎたけれど、「母の幸せそうな顔を思い出して」と言われたら、真っ先に思い出す顔のひとつだろう。

母も歳をとり、数年前に車の免許を返納した。田舎に住む母は、自分一人で思うように買い物にいけなくなった。大好きな花屋さんにも行けなくなった。

歳と共に、母の手入れが行き届く庭の範囲は小さくなった。畳四く五枚分の広さの花壇が、母のその場所になった。昔、母が思い描いていた花いっぱい庭より、こじんまりしていることだろう。だが、その花壇には不思議と花がよく育ち、今でも色とりどりの花が咲く。母の花壇は花でいっぱいだ。「花は正直なの。世話をしたように育ってね。」と母は言う。おそらく私のことも、そんな風に大事に育ててくれたことだろう。「正直者の花たちは、きっと、お母さんのそばに咲いていたいのね。」私がそう言うと、母は幸せそうに笑った。